

「せとうち発見の道」企画展

「旅と〇〇めぐり」

2019年11月28日（火）～2020年2月23日（日）

瀬戸内市民図書館

旅の目的や楽しみは様々ですが、庶民が自由に旅行できなかつた江戸時代などは、神社参拝などを名目とした旅が庶民の楽しみでした。伊勢神宮を参拝する「伊勢参り」や大師霊場をめぐる「四国八十八カ所めぐり」などが代表的です。

現代のわたしたちも、「〇〇めぐり」を楽しむことがあると思いますが、瀬戸内市では、何をめぐると楽しいでしょうか。

◆霊場巡拝の札納箱

旧牛窓民俗文化資料館資料

「霊場巡拝」とは、弘法大師ゆかりの地などをめぐり、祈りをささげつつ旅をするものですが、代表的なのは「四国八十八か所」です。霊場めぐりをする人たちのことを「お遍路さん」と呼び、霊場周辺の人たちは、他所から来たお遍路さんを「お接待」で温かくもてなす習慣がありました。

左のふたつは、鹿忍（瀬戸内市牛窓町鹿忍）の望月さんが、昭和7年（1932）5月に、四国八十八カ所の大師霊場を巡拝したときに持ち歩いたとみられるお札を入れた箱です。表に大きく「奉納 霊場巡拝」と書かれており、それぞれ持ち主の氏名が書かれています。箱の中には「納め札」が多数入っています。旅の安全を願ったものでしょうか、かわいらしいミニチュアの草鞋がつけられています。

右のふたつは、牛窓（瀬戸内市牛窓町牛窓）の浅沼さんが小豆島（香川県）の八十八カ所を巡拝したときのものとみられます。



◆行楽用の弁当箱

旧牛窓民俗文化資料館資料

旧資料館の資料整理札によれば、「弁当箱（遊山用）」とあります。お重と小皿がひとつの箱に納まるようになっていて、外箱のフタには家紋らしき図柄が入っています。

色とりどりの料理が詰まっているところを想像すると、それだけで楽しいですね。



◆矢立（やたて）

旧牛窓民俗文化資料館資料

矢立は、携帯用の筆入れです。写真手前に墨ツボがあり、中には墨をふくませた綿のようなものが入っています。フタをあけると柄の中に筆が入れられるようになっています。

江戸時代には旅の日記を書く人もいましたが、こうした携帯用の筆記具が欠かせなかったのではないのでしょうか。



◆印籠（いんろう）

旧牛窓民俗文化資料館資料

印籠は、薬などを携帯するための入れ物です。カバーから箱を出すと、小箱が重なった状態になっており、紙に包んだ薬を入れられるようになっています。

帯などにひっかけて下げられるよう、ヒモや留め具がついており、表面は家紋などのさまざまな図柄で飾られています。

描かれた図柄が「葵の御紋」であれば、「この紋所（もんどころ）が目に入らぬか！」と言って印籠の御紋を見せ、印籠の持ち主が徳川家の人物であることを知らしめて、悪代官をひれ伏させることもできます。



◆「おふだ」のコレクション

邑久町山田庄の堀野家資料（現在は瀬戸内市教育委員会所蔵）の中には、近代に集められたと見られる神社や寺院の「おふだ」が大量に残されていました。

どのような想いがあったのでしょうか、伊勢神宮（三重県）をはじめとして、近県や岡山県内など、各地に参拝の旅をしていたことがうかがえます。

近隣では出雲大社（島根県）や大山（だいせん、鳥取県）、岡山県内では吉備津神社（岡山市）、木山神社（真庭市）など、瀬戸内市内では貴船神社（邑久町山田庄）、木鍋八幡宮（長船町土師）、品治神社（ほんじじんじゃ、邑久町山田庄）のものもあり、貴重な資料となっています。



瀬戸内市の〇〇めぐり

瀬戸内市内で何をめぐると楽しいでしょうか。

遺跡・史跡の多い瀬戸内市なら、「文化財マップ」を片手に史跡をめぐるともよさそうです。なかでも、古墳めぐりや城跡めぐりは、樹木が生い茂らない冬の時期が良いかもかもしれません。

年末年始には、神社や寺院をめぐるともよいのではないのでしょうか。神社などでは絵馬が掲げられているところもあり、何を描いているか、改めて見てみると、新たな発見があるかもしれません。

近年、里山を歩く道や古道を整えられている地域もあります。

◆「邑久郡大師霊場・八十八カ所巡り」

「大師霊場」「八十八カ所巡り」といえば、四国八十八カ所が有名ですが、全国各地に多くの八十八カ所巡りがつくられ、岡山県内にもつくられました。

邑久郡の大師霊場巡りは、「北巡り」と「南巡り」の2系統があり、それぞれ八十八カ所の札所がつくられました。「邑久郡」には、現在の瀬戸内市全域と岡山市東区の吉井川以東、備前市の一部が含まれます。

八十八カ所が整備された年代は、はっきりとは分かりません。南巡りは、嘉永3年（1850）には現在のような形に整えられたようで、それ以前から大師堂が各地に作られていたようです。北巡りは、江戸時代末期ごろから整備され、明治40年（1907）に現在のような形に再整備されたようです。現在でも縁日（北巡りが4月20日、南巡りが5月20日）には「一日巡り」と称して人々が八十八カ所を巡り、各地で「お接待」を受ける様子が見られます。

（瀬戸内市文化研究会編・発行『旧邑久郡大師霊場 南・北八十八か所巡り案内書』2007年）

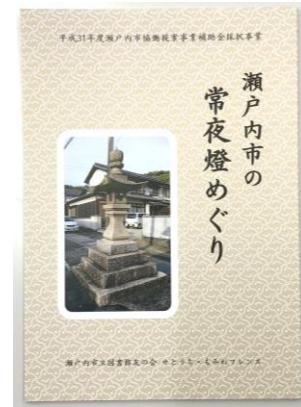
◆『瀬戸内市の常夜燈めぐり』

瀬戸内市立図書館友の会「せとうち・もみわレンズ」では、平成31年度協働提案事業補助金採択事業により、『瀬戸内市の常夜燈めぐり』を制作されました。

常夜燈は、古い神社・寺院には多く残っていますが、それ以外の場所ではどのくらい残っているのでしょうか。「もみわレンズ」のみなさんは、文献調査と市内の現地調査を行い、市内の常夜燈がどこにどれだけあるか冊子にまとめられました。

調べられた常夜燈は、一つひとつの常夜燈に何が刻まれているかを紹介し、番号をつけて地図上に場所を示しています。

(瀬戸内市立図書館友の会せとうち・もみわレンズ編・発行『瀬戸内市の常夜燈めぐり』2019年)



◆「おくの細道アルプス」

瀬戸内市の邑久町豊原地区を中心に広がる大雄山。地域の子どもたちは、戦前からこの山塊を「邑久アルプス」と呼んでいたそうです。キャンプ場が整備されたところに「おくの細道ハイキングコース」が整備され、さらに平成17年(2005)頃から、瀬戸内市・岡山市・備前市の有志が豊かな里山再現をめざして昔の道を再生・整備し、「おくの細道アルプス」が生まれました。

現在では多くの人に親しまれるようになりました。戦国大名宇喜多氏ゆかりの「砥石城跡」や、隣接する大賀島寺など、歴史的な地も含まれており、自然とともに歴史を楽しむことができます。

(おくの細道アルプスの会編『おくの細道アルプス ハイキング案内』参照)

【向山村広吉の四国遍路 ～江戸時代の旅～】

江戸時代の後期、天保14年(1843)に向山村(瀬戸内市邑久町向山)の広吉(当時33歳)が四国八十八カ所をめぐる旅をしました。同じ村の吉之介(当時49歳)と同行の旅でした。

3月11日10時ごろ向山村を出発、吉井川を渡り、金岡あたりから船に乗り、直島で潮待ちをしたあと12日に讃岐の丸亀に到着。

13日、四国遍路は宇多津の道場寺(現在の郷照寺)から始まりました。この日に「接待」を受け、国分寺近くに宿泊。14日、白峰寺から参拝し、仏生山に宿泊。15日、屋島寺などに参拝。この日は9度も接待を受けたうえ、牟礼村の伏見祐進という人の家に無料で泊めてもらっています。

16日は朝から雨で、出発が午後1時ごろになり、八栗寺などを参拝して志度に宿泊。17日は長尾寺から白鳥村へ。18日は阿波に入り、金泉寺、霊山寺、極楽寺に参拝。19日は大日寺から切幡寺まで廻り、西麻植村に宿泊。途中の詳細が不明ですが、25日ごろ土佐へ、4月5日ごろ伊予へ廻り、19日ごろ讃岐に戻り、道隆寺の参拝で遍路を終えたのが20日でした。

40日ほどの旅だったわけですが、これは四国遍路としては当時の標準的な日数だったようです。また、時期的にも農閑期で気候の良い春先を選ぶことが多かったようです。

(『邑久町史通史編』p439～440)